

サンフランシスコ短期留学プログラム

B類 英語専修 1年 鎌田賢人

○サンフランシスコ短期留学プログラム参加の経緯

私がこのプログラムに応募した理由は、多文化理解を深めたいと思ったからです。私の高校は帰国子女が多く、多様なバックグラウンドを持つ人と関わってきました。その経験は、今まで私が持っていなかった視点を見つけたり、価値観の違いから新しい発見をしたり、私自身の成長に繋がりました。実際に海外へ行き、周りに日本語がない環境で現地の文化に触れることは、自身の更なる成長を大きく後押ししてくれるだろうと確信しました。また、私も幼少期にアメリカで生活した経験がありました。12年間で学んだ、日本の現代社会や多様性に対する価値観を知識として得た今、生まれ故郷であるアメリカの Diversity(多様性)の考え方を直接現地で学ぶことは、教師を目指す上で良い経験になるだろうと思いました。

○プログラムを通じた学び

今回の留学では、アメリカの英語教育について知りたいという気持ちが大変強くありました。現在の日本の英語教育がどれほど、「世界で通用する英語を学ぶことに繋がっているか」という疑問や、母国語として英語を学ぶアメリカの授業と日本の授業の違いを知りたいという興味を大学の授業を通じて抱きました。現地の学校では、英語の日常性が大事であることを説明していただきました。本や音楽、ゲームなど子供が自然と関わる場所から英語を導入が最初の一步でした。事実、日本では英語を学ぶという目的以外で子供が英語に触れる機会が基本ないことに気づきました。「日々の生活の中の英語」という視点がとても印象に残りました。また、現地では母国語の英語と並行して第二言語（中国語やスペイン語）を4, 5歳から学び始めていました。小さい頃の方が習得に可能であるという、教科書で読んだ内容(臨界期説)が実践されている現場を見ることができたことは大変貴重な経験でした。アメリカで見学したどの授業も、生徒の積極性は日本と天と地ほどの差で、大きなインパクトを受けました。クラス全体と担当教員がリスペクトし合い、親密な信頼が築かれていることが見え、そこに鍵があるように見えました。

また、歴史に関する学びもありました。LGBTQ, Japanese American など人種に関するものや、アメリカ視



見学で訪れた The GLBT Historical Society Museum。歴史的に関連深いカストロ通りの近くにあります。

点でみた日本の歴史など、今まで日本で学んだことがあるものが関連してくるけれど、日本での学習では基本学べない、現地に行ったからこそ学べるものがあつたと感じています。カストロストリートで感じた、時代と共に変化し理解が拡大していく感性と、同時にその背景には押しつぶされたり、弾圧されたりした人々の努力があつて今があることや、エンジェルアイランドで知った当時の移民に対する扱い、人種による分散やアメリカで生まれたのにもかかわらず国籍が得られない時代があり、多くの人が苦しんで戦ったきたこそ今があるということを学びました。

○プログラムを通して最も印象に残ったことや気づきを得たこと

現地では、多くの人が初対面や面識がないはずなのに、声をかけてくれたり、自分の話をしてくれたりとても気軽にコミュニケーションをとってくれたのが印象に残っています。今回のプログラムを通じて英語のスピーキング力を向上させたいという思いがあり、積極的に現地の人と会話をするようにしましたが、それ以上に現地の人が話かけてくれたという印象でした。日本ではよく「知らない人にはついていかない」と小さい子に教え込むように、近所づきあいはあるものの、他人との関係はある程度一線を引いている部分があるため、社交性の違いに驚きました。

余談にはなるのですが、自由行動の際にゴールデンゲートブリッジへ観光に行った際に、初めてゴールデンゲートブリッジが日本の瀬戸大橋と姉妹関係にあることを知りました。調べてみると、その理由は技術提携や建築者などではなく、「ゴールデンゲート海峡を挟んでサンフランシスコ市の対岸にあるサウスリート市が、坂出市と立地条件が似通っている」というもので、橋自体にあまり関係がないことにツッコミを入れそうになりましたが、世界と日本のつながりという点において地理的類似性という観点で考えることもできるという気づきにもつながりました。



○今後の大学生活や自身の将来に及ぼした影響

今後の大学生活で多文化理解の本質を、自分なりに見出す覚悟を新たにしました。今まで、「多文化理解は大事だ」という言葉だけにとらわれている部分があり、今回の留学を通じてLGBTQ/人種人権について学んでいく中で、今まで自分が学んできたことは本当に多文化理解と言えるのかという疑問が湧きました。全く違うとは思いますが、自分が普段生活しているコミュニティの中での多文化理解とは井の中の蛙に等しいと感じました。今回のプログラムのように自分で本物を見て、体験したことで得た

ものは非常に大きいです。学生生活を通して、自分なりに多文化理解とは何かを考え、偏見や固定概念にとらわれない教師になりたいと思います。

また、現地の学校での先生方の授業を通じて、授業のスタイルについて考えさせられました。生徒それぞれの個性を知っているからこそ、生徒の積極性を生かしたり、殺さずにうまく抑え込んだり、授業の進行と生徒とのより関係、信頼を築いている授業にとっても感動しました。しかし同時に、その信頼関係と授業を作るのは容易ではないということも見学を通じて実感しました。生徒と教師の距離間という点は、とても難しいと以前から感じていたため、今回改めて考える良い機会になりました。今後、実際の教育現場にお邪魔させてもらったり、教育系のイベントに参加したり、自分で企画したり、大学生活の中で考える機会はたくさんあるでしょう。教師の卵という教える立場と、学生という教わる立場の両方にいるからこそ見えるものがあるはずだと考えています。それらを見つけ、同じく教員を目指す友人たちと議論したいと思っています。